

常同行動減少を目的としたゾウの給餌に関する試験

○安藤 正人¹⁾, 庄子 泰之¹⁾, 金澤 朋子²⁾

(¹⁾ 横浜市立金沢動物園 , ²⁾ 日本大学生物資源科学部)

横浜市立金沢動物園では、飼育しているインドゾウの常同行動の減少を主な目的とし、行動調査を行ってきた。基礎調査により、一日の常同行動の約90%が夜間から早朝の寝室内、特に餌の無くなる早朝に多く起こっていることがわかり、この間の常同行動を減少させる目的で自動給餌機を作製した。これを用いて早朝に1回給餌した過去の試験では、給餌機の存在を気にしたためか、収容後の時間帯で常同行動が増加し、装置が稼働する早朝の常同行動が減少した。今回の試験は、常同行動の減少をめざし、より有効な自動給餌機の使用方法を検討した。

供試個体は前回と同じ雌、(1978年生まれ、約3,600kg)とし、自動給餌機は、前回同機種(電磁ソレノイドとプログラムタイマーを用いた物)を使用した。試験には、通常の夜間給餌飼料に加えて、木の葉(マテバシイ)6kg(3kgを2回)を使用した。木の葉を通常の夜間給餌飼料に単に加える期間を対照区とし、“試験区1”として前回の試験で常同行動が増加した夕方(19:30)と、効果のあった早朝(06:00)の各1回ずつ合計2回の給餌、“試験区2”としてもともと常同行動の集中していた朝の時間帯(06:00及び、07:00)のみに連続した合計2回給餌の、各区5日間ずつ実施した。この間の行動を「操作」「常同行動」「移動」「休息」「静止」「その他」の6項目に分類し分析した。

試験区1では夕方の操作の減少と常同行動の増加が見られ、早朝は操作の増加と常同行動の減少が見られた。試験区2では試験対象時間全体において操作の増加と常同行動の減少が見られた。

このため、元々常同行動の多い時間帯に、複数回の給餌を行う事で高い効果が得られることが分かった。